

バレンタイン短編集 2026 サンプル

※2026年のバレンタインは土曜日です。

セクシャルスクール	2
カウンセリングルーム	24
大人の夜は子どもの時間	31
二度目の人生をあなたと	42
篠崎×安西&キス・イン・ザ・ダークコラボ	55
あとがき	113

セクシャルスクール

今日最後の授業が終わった。ふう……と息を吐きたいのをこらえて須坂に貞操帯をつけてもらう。

「ありがとうございます」

鍵をかけた須坂が上を向いた。

「なあ、今夜俺の部屋に来れるか」

「ほ、補習ですか……」

「里実……」

須坂があきれた顔をする。

「あんな、それだったら放課後に教室でやってる」

「すみません……」

しかし、今日のテストが散々だったのだ。いや、「今日も」が正しい。それにランニングの最中に二回転んだし、騎乗位の授業では足がつりそうになって心配をかけてしまった。

「いいから——いや、やっぱり迎えに行く」

「ご飯の後ですか」

「いや、その前。飯はコンビニ弁当でいいか。買っておくから」

「えっ？ 今日おかず兄たちいないんですか？ お休みですか」

「いや寮食堂はやってるけど……」

ではなぜコンビニ弁当を食べるのだろう。

（せっかくおかず兄たちがご飯を作ってくれるの

に……？)

須坂には何か考えがあるのだろうかと思いつつ、作ってくれる調理員たちに申し訳ないという気持ち拭えない。

里実が黙ってしまったからか、須坂が振り切るように言った。

「まあいい。とにかく部屋には行くから。食堂には一人で行くなよ。俺と一緒に行くぞ。あと、今日は保健室に行くなよ。何かあったら俺に言え」

「わかりました」

理由は言われなかったけれど、きっと何かあるのだろう。

じゃあ十八時頃に、と話して里実はとぼとぼと寮に戻った。

(テストの復習しなきゃ……)

あとはストレッチと、今日の授業の復習。スクワットと踵を上げる筋トレもしておかないと、騎乗位がうまくできるようなれない。

(やることがいっぱいだ……)

他にも漢字と算数のドリルもある。読むように言われている小説も。小説は児童書と言われるものらしいけれど、すべての漢字にふりがなが振ってあるわけではないし、意味がわからない単語を調べながらでないと読み進められない。しかも昨日まで読んだ内容がなんだったかを思い出すために、最初の方からパラパラと確認しないといけない。

（ううう……）

それでも今日は金曜日。明日も寝坊はできないけれど、学校が休みな分、勉強の時間を取ることができる。授業が進まないので復習すべきものが増えないのもよかった。

（えつとまづは……）

すぐに机に向かい、教科書を取り出す。

（口で愛撫するときは……啜えるだけじゃなく……）

しばらく勉強をしていると、段々眠くなってきてしまった。

（うう……ねむ、い……）

しかしまだまだやることがある。時計を見るとまだ十六時。眠ってしまったないようにぶんぶん頭を振り、目をこする。

――と。

「いたっ！」

右目が急に痛くなった。まつ毛が入ったのだろう。

「いたたた……」

右目を手で押さえたまま洗面所に飛び込む。

しかし洗面台の鏡でよく見ようとしても、低身長な里実には手洗い場が邪魔して顔を近づけることができなかった。

（と、遠くて見えない……）

困った。どうにか取らないと勉強ができない。

（眠気は覚めたけど……）

しかし、手鏡など持っていなかった。

(……うーん……あ！)

保健室なら、養護教諭が取ってくれるだろう。

右目を押さえたまま部屋を出て、寮の保健室に急ぐ。
幸い養護教諭は寮に戻ってきていたようで、在室の机
がかかっていた。

ノックをしたところで、大切なことを思い出した。

「あ……」

須坂に、保健室には行かないようにと言われていた
のだった。しかしもうノックをしてしまった。

「はいは——あ、里実くん！ どうしたの、怪我？ 具
合悪い？」

養護教諭の慌てた様子を見て申し訳なくなった。来
ちゃいけないのに来てしまった。それに里実がい
つも問題を起こしているからか、すでにひどく心配し
ているようだった。

「あ、えっと、その」

「目？ 目が痛いのか？」

「まつ毛が入ったみたいで、取れなくて。でも今日、来
ちゃいけない日だったんですね、すみません」

養護教諭が首をかしげる。

「来ちゃいけない日？ とりあえず入って。診てあげ
る」

養護教諭が嘘をついている感じはなかった。すみま
せんと行って中に入る。

(わ……！)

室内にはチョコレート匂いが充満していた。

（人気者だ！）

いったいどれほどのチョコレートもらったのだろう。

「座って」

「失礼します」

ソファに浅く腰かける。すると、棚を開けていた養護教諭がベッドエリアの方に向かって声をかけた。

「こら、止まってる」

「すみませっ」

「うう……」

どうやら、二人いるらしい。しかしカーテンが閉じられていたので中は見えない。

「お待たせ」

「すみません」

手を目から外し、養護教諭を見上げる。

あっかんべーをするように目の下を引き下げられた。

「ああ、あるね。まつ毛じゃなくて髪の毛だよ。痛かったね。目だけで上を見て」

綿棒で、一瞬だった。ぬるぬると抜けていく気持ち悪い感触が伝わってくる。

「ほら、取れた」

「ありがとうございます」

「どういたしまして。ところで、来ちゃいけない日ってなんのこと？」

「あ、須坂先生が、今日は保健室に行っちゃダメって」
養護教諭が首をかしげる。

「なんで？」

「理由は何も」

とりあえず迷惑をかけなかったことにホッとした。でももしかしたら、チョコレートを食べるのを邪魔してはいけないという意味だったのかもしれない。こんなに匂いが充満するほどもらったのなら、食べきるのは大変だろう。

「ふうん……あ、そうだ、ちよつとおいで」

「何ですか？」

養護教諭はベッドエリアに行くと、閉じられていたカーテンを開いた。

「えっ」

中には二人の男の子がいた。どちらも全裸。そして甘いチョコレートの香りが一気に濃くなる。

養護教諭が男の子たちに発破をかけた。

「ほら頑張って」

「先生……」

泣きそうな男の子。一人はチョコレートのついたペニスを見せつけるように足を大きく開いて座っており、もう一人はその正面に四つん這いになっている。そのアナルはヒクヒクと動き、寂しさを訴えていた。

そして二人の横には溶けたチョコレートの入ったボトルと、金属製の細い棒。

「先生……？ ああ、」

これは何をしているんですか——里実が思わず目で問いかけると、養護教諭はにこりと笑んだ。

「二人ともエッチなことがしたくて我慢できないって
言っでここに来たから」

くく略くく

カウンセリングルーム

「ねえ、今週末はバレンタインですよ」

「チョコレートが欲しいのか」

話題に出した自分が馬鹿だった。

「……別に」

ただ、恋人になつて初めてのバレンタインで、デート
するかなとか、ちよつとイチャイチャしたりするかな
とか、日常とは違ふ何かをほんの少し期待しただけだ。

パソコンを開き、チョコレート専門店のホームページ
を出す。

「自分で買うのか」

この男は、自分がもらうかもしれないとは考えない
のだろうか。

「そんな寂しいことしませんよ。竹内さんに送ろうか
と思つて」

店長にもあげようと思つていたが、そこは口に出さ
ずにおく。

「どうして」

「お世話になつてゐるから」

「どの言葉がよかったんだ」

「どの言葉って？」

「樹希は甘やかされるのが好きだからな。『手洗いしておいてあげる』か？」

「……は？」

会話が成立しないのはいつものことだったが、今回はまったく見当もつかなかった。

「手洗いって、トイレのこと？」

「お前はいつたいたいなんの話をしているんだ」
新津にだけは言われたくない。

「そっくりそのまま丸ごと返すわ」

「どうしてトイレの話が出てくるんだ」

「手洗いってそっちが言ったんじゃない」

「お手洗いのことじゃない。手で洗うことだ」

「だからそれはなんの話なんですか」

「お前のオカズの話だ」

「い！ み！ が！ わかんねええ！」

理解不能。頭を抱える。

くく略くく

大人の夜は子どもの時間

ドアが開いた瞬間、玄関に座って帰宅を待っていた
浩太が塚田に抱きついた。

「おっと」

「お兄ちゃん！ 見て！ もらったの！」

「バレンタインか。よかったな」

「保育園の帰りにももらったんですけど、大切なんだったで開けもしないんですよ」

おかえりなさい、と言いながら塚田のビジネス鞆を受け取る。しかし塚田のもう片方の手に見えた大きな紙袋に、ほんのわずかに心がざわついた。

「だって食べたらなくなっちゃうでしょ！」

「開けるだけならなくならないよ」

浩樹の返しに、浩太がぶくーつと頬を膨らませる。

「見たら食べたくなっちゃうもんな。じゃあ代わりにこれを食べるか」

塚田が紙袋から色とりどりの箱を取り出した。見るからにもらいもの。高級そうなチョコレートーが、次々とダイニングテーブルに山積みにされていく。

「お兄ちゃん、こんなにもらったの?!」

「大人には義理チョコっていうのがあるんだよ」

塚田が箱を裏返し、アルコールの有無を確認する。

「これはだめだな。ああ、これなら食べられるよ」

「いいの？ お兄ちゃんがもらったんでしょ」

「特別な気持ちがあるわけじゃないんだ」

もしそういうものがあればきっと塚田は袋から抜いて、問題のないものだけを持ってきていただろう。

けれど、恋人が明らかに義理を越えた高級品をもらっていると思うと面白くない。が、八元は息子の前でそれを感情のまま伝えるほど子どもではないし、かといってうまく伝えられるほど大人でもなかった。

「ほら、先にご飯。もう遅いから、チョコは明日ね」
「おっと、そうだな。すまない。浩太、手を洗いに行く」

その夜も普段と変わらなかった。

浩太の寝かしつけを終えた塚田がリビングに来て、
八元はキッチンでコーヒーを淹れる。

塚田の視線が、ダイニングテーブルに置かれたまま
のチョコプレートに箱に移った。寝る前に浩太が並べて
おいたものだ。

「食べないのか」

「『お兄ちゃんがもらったもの』ですよ」

ツンとした雰囲気を感じ取ったのか、塚田が苦笑す
る。

「義理だよ」

「義理のふりした本命もありますよ」

くく略くく

二度目の人生をあなたと

今年は義理チョコが減るらしい。つまりもらえる人
が減るということですね、と当然のことをテレビのコ
メンテーターが言っている。

「バレンタインかあ」

朝食の目玉焼きを食べながら貴之が呟いた。

「あ、もし予定があるんだったら……」

「いえ、ないです！ ないない」

気を遣われているのか、それとも本当に予定はないのか、康人には判断がつかない。

様子を窺うように見てしまったからか、貴之が箸を置いた。

「懐かしいなと思って。実は道隆くんの存在に気付いたきっかけがバレンタインだったんですよ」

「バレンタイン？」

「うん。職場の同じビルの女の子からチョコレートもらって、そのお礼をメールしようとした時に、予測変換に気が付いて」

「え！」

知らなかった。その女の子とはどうなっているのだろう。

いつか貴之に好きな人がきたら――。

そのときはこの関係が終わる。もしかしたら貴之はそんなふうには考えていないのかもしれないけれど、それが道隆と康人の共通認識だった。

「その子には悪いことをしたけど、いいことづくめでした」

「え」

「お二人と知り合えたことが何より嬉しかったというのは大前提として。お恥ずかしい話ですが、当時は姉からも彼女作ればってよく言われていたんです。それで俺も、その子に対して恋愛感情とかなかったのに、まあ

いい子だなとか、かわいい子だなぐらいには思っていて……でもそんな時にお二人の存在を知って、恋愛とか、人を大切にすることってこういうことだよなって。だから中途半端な気持ちで交際して彼女を傷つけるようなことにならなくてよかったです」

「貴之さん……」

誠実な人。真面目で優しくて人を大切にできる人。

「それに今は、お二人を見てたら恋愛なんかできないなって」

「えっ」

「だってお二人ほど深く愛し合える自信がないです。それになんか最近こう……あれなんですよね、お二人を見る目が変わったっていうか」

「それはどう……?」

「同僚の言葉を借りれば推し——ですかね」

「……は?」

「お二人は俺の推しなんですよ。目標というか神様というか、恋愛関係にある人っていうのはこうあるべきだよな、みたいな。それを体現しているっていうか」

(神様……)

今貴之の中で、道隆は爆笑していることだろう。

「だから今は推し活で幸せっていうか、それ以外はないっていうか」

「はあ……」

「もともと恋愛感情とかよくわからなかったのいいんです。それに今年は姉からのバレンタインがないで

しょうからホワイトデーの出費が抑えられますし」

「出費って」

あけすけな言い方に思わず笑う。でも家族からなんてそんなものなのかもしれない。

「康人くんは道隆くんに——っと、だめですね。道隆くんも聞いていますから」

気遣いに、曖昧に笑っておく。

一応、会社帰りにチョコレートは買ってきていた。けれどさすがにバレンタインコーナーに入ることとはできなかったので、ただの板チョコだ。他にも少し、三人で食べられるようなバラエティパック。

〃
〃
略
〃
〃

篠崎×安西&キス・イン・ザ・ダークコラボ

北川輝

「自分の間抜けさがショックです……」

「また会えるよ」

「はい……」

以前、スーパーで転んだ輝を助けてくれた安西と篠崎。また彼らに会いたいのだが、なかなかそううまくはいかなかった。

「せっかく服屋さんで会えたのに、なんであの時連絡

先を訊かなかったのか……」

「じゃあ、探しておくよ」

「え？」

「人探しは得意なんだ。特に彼らは目立つからな。数日で見つかる」

「そうなんですか？」

外見が目立つのだろうか。たしかに篠崎は背が高い印象だったが、三崎もあまり変わらないような気がする。それとも輝が知らないだけで、三崎も目立っているのだろうか。

「うまくいけば明日には見つかる」

「あ、や、いえ、そうじゃなくて。目立つって。でも写真とかないですよね？」

「ああ、人じゃなくて車から辿るんだ」

「ナンバー、覚えてるんですか」

「いや、ほとんど日本で見ることのない高級車だった」

「ひえ……」

そんな車に乗っていたのか。汚してしまわなかったか、と考えて血の気が引く。

「待っててくれ。見つかったら教えるよ」

衣擦れの音。携帯をポケットから出したのだろう。慌てて止める。

「いえ！ いいんです、用があるわけじゃないですか
ら」

ただ、また会いたい、話したい、と思うだけだ。

「それにほら、偶然会えた方がありがたみがあります

し」

「そうか？」

「あ、あの、特別な感情はないですからね？ その、隆司さんに対して抱いているような」

「わかってる」

肩を抱かれ、頬に口づけられる。

「彼らも深く愛し合っているようだし、そんな心配はしていないよ」

彼らも。その言葉が嬉しかった。

「僕たちと同じくらいってことですか」

「俺たちの方が深い」

柔らかな、笑んでいるような声だった。

輝の頬も勝手に緩む。

「次に会えたら連絡先を交換してもいいですよね？

安西さんとなら」

「ああ、もちろん」

「ありがとうございます」

「にんじんも欲しいです」

「二本入りでよろしいですか」

本当は三本入りが欲しかったが、しかたない。ないのかもしれないし、重さいくらで売っているものなら探させてしまうことになる。店員を長く拘束しておくわけにはいかない。

「はい、それでお願いまし——」

「あれ、北川さんじゃないですか？」

覚えのある男性の声が背後から聞こえた。反射的に振り返る。

「もしかして」

「安西です。こんばんは」

「わ！　こんばんは！」

会えた。ようやく。

嬉しい。が、今はスーパーの店員に付き添ってもらっている時だった。

「もしよかったら、一緒に回りませんか」

その申し出はとてありがたかった。

「いいんですか？　ありがとうございます」一度言葉を切り、店員に向き直る。「すみません、ありがとうございます。とても助かりました」

「とんでもございません。それでは失礼します」

「あ、かごは僕が。北川さん、僕のカートにのせますね」

「ありがとうございます。今日はおひとりですか」

「ええ。篠崎はまだ仕事をしていて」

答えながら、安西が腕を握らせてくれた。

「そうでしたか。安西さん、お急ぎではないですか」

「全然、少しも。夕食はもうできてるんですけど、篠崎の電話が長引いてるみたいで。って言っても、たぶん口調から友達かなって感じがしたので出てきたんです」

「友達って、アメリカのですか」

「英語なので、そうだと思います。日本語を話す時はゆっくり穏やかな感じなのに、英語だとすつごく早口

なんですよ」

想像つかないでしょう、と安西が笑う。

「篠崎さんとは、もうお付き合いして長いんですか」

「まあ……それに早いうちから一緒に住み始めたし、篠崎は家で仕事をしているので一緒にいる時間が長くて」

ということは、安西は働いていないのだろうか。けれど仕事は？ とは訊きづらい。

「そうなんです。信頼関係があるんだなあって、初めてお会いした時から声の感じて思っていました」

そう言うのと照れたのか、安西は一瞬黙ってしまった。しかし口を閉ざしていては感情が輝に伝わらないと気付いたのか、慌てた様子で話しかけてきた。

「えっと、今日の買い物は？」

「実は必要なものはもう。でも新発売とか、おすすめてあったら教えていただけませんか」

それから、タイミングを見失う前に伝える。

「あと、もしご迷惑でなかったらご連絡先も」

「ぜひ！ 僕も次に会えたらって思ってたんです。実は毎回ここに来る度に北川さんいないかなってきよろしてました」

「嬉しいですよ。僕もお声掛けいただけなかったって思っていました」

しかし店内では邪魔になるということで、連絡先の交換は買い物を終えて外に出てからにしようということになった。

「今日はお刺身が安いんですよ。あとカレイ」

「卵入りですか」

「入っていないのがありますよ」

値段を聞き、持たせてもらう。二切れらしいがずっしりとしていて重みがあった。それを一パックかごに入れてもらう。

「あ、そうそう、北川さんって甘党でしたよね。新発売のチョコレートでおいしいのがあって」

「わ、なんですか？ 教えてください！」

院長や石和もおいしいものを見つけると教えてくれる。けれど安西の好みも知りたかった。

安西は夕食ができているというだけあって、目的は特になかった。クッキーやケーキの話をしながらお菓子コーナーに向かう。

途中、安西が思い出したように言った。

「そういえば、もうすぐバレンタインですね」

「あ、そうですね」

忘れていたわけではないが、まだ二週間以上ある。

「恋人——三崎さん、でしたっけ。何かあげるんですか」

「甘いものは食べないので、コーヒーカーな。インスタントですけど。安西さんは？ 篠崎さんにあげるんですか」

「うちもあんまり甘いものは食べないので、イベントごとはだいたい僕がもらうばかりですね」

そう言って安西は笑ったけれど、きつと何かあげてくれるだろう。

歩きながら安西が呟く。

「僕も今年はコーヒーをあげようかなあ……」

「いいんじゃないですか」

「でも、いつも僕が淹れてるんですよ」

「あ……」

では、あげる・もらうという感覚がないかもしれない。それに輝自身も、コーヒーばかりあげても面白くないよなとは感じていた。

「プレゼントって難しいですよ」

「やっぱり、見えてても悩めますか」

「悩めます。特に篠崎とは金銭感覚も違うし、育った環境っていうか、うちはそもそも文化から違いますから」

「たしかに、国が違いますもんね。金銭感覚が違うと難しいっていうのは僕にもわかります。うちもなんです」

「三崎さん、高級感ありますもんね。言い方はあれですけど、庶民同士ならいいんですよ。例えば僕と北川さんがプレゼントしあうってなったら、お互いおすすめの菓子を交換するって感じで楽しめるじゃないですか。予算はこれくらいにしようね、とか話して」

「わかります！ それで一緒に食べたりとか」

「絶対楽しいですよ！ あ、じゃあ今度いかがですか。うちにいらっしやいませんか」

「あ——」

行ってみたい。というより、もっと長く話してみたい。それなら慣れている三崎との部屋に来てもらった方がいいのだが、三崎に確認せずにうちに来てくださいと

は言えなかった。

「散らかつてはないし、危ないことはないと思うんですけど」

そこまで気を遣ってくれているのだから、断るのは失礼かもしれない。

「いいんですか？　でも篠崎さん、ご自宅でお仕事してるって」

「書斎にこもってるから大丈夫ですよ。笑い声にっつられてのっそり出てくるかもしれないですけど」

のっそり、という表現が可笑しかった。

「ご迷惑でないなら……でも、ご負担をかけちゃう気がします」

「移動する時はこうして腕を握ってもらえばいいんですよね？」

「まあ……」

でもそれだけではない。他人の家を歩き回ることはないが、座る場所やテーブルの位置はもちろん、トイレを借りるとなればトイレそのものの場所だけでなく、トイレトペーパーや水洗レバーの位置まですべて教えてもらわなければならない。

「勉強しておきます。僕は家事をしているだけなので、時間はたっぷりありますから」

では、安西はやはり仕事はしていないということか。それならせつかくだから甘えてしまおうと思った。これをきっかけに、視覚障がい者のことを知ってもらえたら嬉しい。

「じゃあ、お願いします」

うちにも来てくださいと続けられたらよかったが、それは三崎に確認してからにすることにした。

「日にちとかは今度連絡取りましょう。あ、これです。おすすめの新発売。チョコレートの中に砕いたナッツが入ってるんですけどー北川さんって、今さらですけどアレルギーとかありました？」

「いえ、なんにも。目が見えないだけの健康体です」
安西のおすすめなら、どんなものでも食べてみたかった。ひと箱かごに入れてもらう。早く食べたい。わくわくする。

「僕も買っちゃおうーそうだ、うちでお菓子作るってどうですか？ 普段、お菓子とか作りますか？」

「全然。いただいたパイシートは、切って焼くだけだったのでもいいしかったですけど」

「じゃあ作りましょうよ。簡単なやつ。クッキーとか、焼きたての匂いが最高ですよ」

「わあ！」

聞くだけでよだれが出てくる。食べたい。とても食べたい。どんなに有名なお店でも、焼きたての熱々クッキーは食べられない。

チョコチップを入れようとか、ココア生地にしようとかそんな話をしながら会計に向かう。

外に出ると、すぐに連絡先を交換した。その時に年齢を聞くと、安西は輝の二つ年上だった。

「敬語、使わないでください」

「じゃあ、北川さんも」

でも、出会いからお世話になりっぱなしなのですぐに頷くことはできなかった。

「子どもの頃の二歳差って大きいけど、大人になると変わらないし。せっかくだし、輝くんって呼ばせてもらおうかな」

「わ、ぜひ！」

「じゃあ僕のこと下の名前で」

「諒、さん」

「うん」

なんとなく照れくさくて笑っていると、安西が「あと短く声を発した。」

「あんざー諒さん？」

「篠崎！」

こつこつと靴音が近づいてくる。

「諒。北川くんといたのか」

「こんばんは」

「仕事帰りか？ お疲れ様。おしゃべりは終わったのかな」

「今連絡先を交換したんです。今度うちで一緒にクッキー焼こうって」

「楽しみだ」

すんなりと返された言葉。輝を家に入れることを少しも嫌がっていないことがわかり、その人間性に胸を打たれる。

「え、食べるんですか？」

安西がからかう。

「くれないのか」

しょんぼりした声がかわいかった。

「ところで、もう買物物は終わったのかな。送っていくよ」

「いえ、自分で帰れますから」

別れがたいが、送ってもらうのは申し訳ない。それに高級車だと知ったばかりだ。

「もっと話したいし、ぜひ」

安西の気遣いも嬉しかった。それなら、と思った時だった。

輝の携帯が鳴った。音声が三崎からの着信を告げている。

「ちょっとすみません」

安西たちに一言断ってから応答する。

「もしもし」

『どこにいる？』

「帰りに寄ったスーパーで、偶然安西さんと会って」

『迎えに行くよ。彼も送っていこう』

4万7千字、そのうち約半分は篠崎×安西&キスインコラボです。

本番はありませんが、各CPの日常を覗き見ていただけたら嬉しいです。

PDFは縦書きと横書き、Epubデータで電子書籍に

も対応しています。

どうぞよろしくお願いいたします。

バレンタイン短編集2026 サンプル

@gooneone (ごーわんわん)

2026/2/21

メール:gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter:@gooneone11

商業情報は『リットリンク gooneone』で
ご検索ください。

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。

※この作品はフィクションです。

実在する人物、団体等とは一切関係ありません。